

第15章 海南分場における研究

第1節 研究の変遷

昭和29年、試験地開設当初の試験はビニール資材の利用によるトンネルおよび屋根型フレーム栽培におけるキュウリ、ナス、トマトの品種選定で始まった。その後、昭和31年から33年に大型ビニールトンネル(間口2.5~2.8m)構造改善、内部被覆の効果について明らかにし、現地のビニール被覆栽培の拡大を図った。

昭和34年頃には現地のビニールトンネルも大型化し、キュウリ、パイナップル栽培も急激に伸びた。このパイナップル栽培に対応した試験が昭和34年から42年まで続き、栽培改善試験と冠芽抑制のホルモン処理試験を行った。特に、冠芽抑制の効果は高かった。しかし、現場のパイナップル栽培は昭和44年頃には、沖縄、台湾、ハワイなどの産地の増産により価格が低下し、急激に面積も減少してしまった。

昭和38年、海部町那佐地区にれき耕施設ができたのに伴って、試験地においても昭和39年よりれき耕試験を開始し、キュウリれき耕栽培上の問題の解明、特に品種と栽培法の改善を図った。

鉄砲百合の生産は昭和23年から現地に始まり、海部青軸鉄砲百合として京阪神市場や名古屋市場で好評を博した。しかし長年の自家増殖のくり返しによる種球の劣悪化が問題となり、昭和32年より44年まで試験課題として取り上げ、優良系統の育成を行い、優良球を増殖、配布し促成栽培の生産安定を図った。

大ショウガの促成栽培は県内でも海部郡は新興産地で、昭和46年には露地栽培、促成栽培を合せ10 haに伸びた。しかし促成栽培の年数は浅く栽培上の問題が多かった。そこで昭和46年からハウス栽培技術体系について、栽植密度、種球の大きさ、栽培温度と発芽および収量性を検討し、促成栽培法の改善を図った。また、特記すべき成果として、ジベレリン処理がある。ジベレリンを処理することにより塊茎の伸長を促し、収量の増加とともに色つきがよくなり、商品性を高める技術で全国的に普及した。

海部郡のキュウリの施設栽培は昭和24年から始まり、本県では最も古い産地である。昭和30年からのビニールの普及により、トンネル栽培からハウス栽培へと前進し、その後、面積も伸び昭和43年には野菜指定産地制度により指定され、昭和46年には促成キュウリを中心とした構造改善事業を開始し、施設の大型化、近代化と生産性の向上と安定を図るとともに、一方では中山間部基盤整備により、露地野菜、特に抑制キュウリの栽培を中心とした集落の産地化が進められた。その後、キュウリの生産は昭和50年頃をピークに、生産者の老令化、後継者不足、単価の伸びなやみ、連作による収量の低下などの要因で減少し、昭和57年度には全作型で22 haになった。キュウリの試験はこのような産地形成の中で栽培上の問題解決のため試験地開設当時から現在まで連続してきている。試験地開設時から昭和39年頃までは作型別の品種選定、病害予防試験や施設内の構造改善試験が中心であった。昭和40年からハウス栽培で久留米落合H型が主流をなすようになってから、久留米落合H型の作型別の栽培改善試験が主体となった。その後、昭和47、48年にはキュウリのつる枯病、つる割病対策としての接ぎ木の効果と収量性を検討し、後の接ぎ木栽培の時代の資料となった。昭和50年には従来の黒イボキュウリに替る関東からの白イボキュウリの促成栽培に取り組み、現地導入上の問題点を検討し始めた。その直後、省エネルギー時代へと突入し、現地のキュウリ栽培全部が白イボへ転換し終ったのは昭和56年になった。現在は省エネルギー時代の品質と収量を求める品種と、連作障害の改善の方策が当面の問題点となっている。

その他、現在分場では促成ハウスイチゴを対象とした、ポット育苗栽培の確立、水田再編対策としてグリーンアスパラカスの栽培改善、輪作体系組み入れのための一寸ソラマメの早出し試験、イチゴ跡作のハウスメロン(アムス)の栽培改善を行っている。

